

今回は、1983 年に刊行され、この 1 年余りの間に、100 万部を発行する大ヒットとなった『思考の整理学 by 外山滋比古』を紹介します。

「思考の整理には忘却がもっとも有効である」と書かれています。現代は情報過多の社会です。余計な情報が脳を占領しては、思考の妨げになります。なぜなら情報に引きずられて、考える事を忘れてしまうからです。大昔は、生き字引といわれる、知識の宝庫のような人が珍重されましたが、今では情報の記憶はコンピュータの仕事です。

人間の脳は、倉庫ではなく創造的な工場であるべきです。工場が手狭で散らかってては、作業ははかどりません。情報は氾濫する現代社会では忘れる努力が必要なのです。

人間の脳には自分にとって重要な情報だけをふるいにかける機能があります。特に、睡眠や運動によってこの働きは高まります。起きてすぐの『朝飯前』に仕事をしたり、逍遥(しょうよう=そぞろ歩く事)しながら思索すると、成果が上がるのはこのためです。

忘れるというのは、コンピュータには出来ない、実はとても創造的な作業でもあるのです。忘れ方にこそ、一人ひとりの個性も表れるのです。

大工さんは、生木は狂いが生じるので、時間をかけて乾燥させた材木を使います。思考も同じです。忘れるという、行為を繰り返す中で、耐えて残り、自分の中で十分に発酵した知識やアイデアこそが、独創的なものを生み出すための本当の力になるのです。

1) 思考の整理には何がもっとも有効ですか？

()

2) 余計な情報が脳を占領しては、思考の妨げになる理由は？

()

3) 人間の脳は、どのような工場であるべきですか？

()

4) 睡眠や運動によって、どのような機能が高まりますか？

()

5) 忘れるというのは、どのような作業ですか？

()

6) 何が独創的なものを生み出すための本当の力になりますか？

()